

「Anonymous / 匿名写真」について

2013年 2月15日 (金)

浦田 健二

最近、「匿名性」が気になっている。今回展示している作品「Anonymous」シリーズは、その「匿名性」をキーワードにした作品たちだ。手持ちの写真の中から数点を選び、人物の顔の部分に絵の具を塗り、意図的に隠された状態で画面を構成してある。

■これまでの作品との関連性

これまで私は、「human≡object」(2010年)という、人間に泥を塗って、人体を人形化する作品や、「ATTACK!!!」(2011年)という、様々な場面で顔面にパイ投げをするという作品を発表してきた。そこに共通するものは、ウェット&メッシー(濡らしたり、さまざまな物で汚したりするような性的嗜好)的なフェティシズムであったり、ぬめぬめとした質感の皮膚感覚であった。

いずれの作品も、人間の皮膚を覆うような表現方法で、人体をモノ(物)化する行為であった。モノ化する作品といえば、2007年から制作している「BODYSCAPE」シリーズもそうだ。このシリーズは、「人体を風景のように見立てる」というコンセプトのもとに作られた作品だが、ここでも人間をモノのように見るという視点がある。

人間をモノのように見るという感覚はどういうことかという、例えば人にはそれぞれ名前や顔、性格、経験や実績に基づく個性や人間性、その人らしさというものがあって、それによってお互いを区別し、認識している。しかし、泥をかけられて人形のようにされたり、パイ投げをされて顔を隠されたりすると、そういったものが剥奪されて、ただの男性A、女性Bになってしまう。それがモノ化するという感覚だ。

これらの作品を制作してきて自分自身が感じてきた「おもしろさ」を、ずっと「人→モノ」の面白さだと感じ、伝えてきたのだが、それは言い換えると人間を匿名化する行為だったのではないかと最近思うようになったのだ。泥にしるパイにしる、顔という重要な個人情報を引きぬいて、形骸化・平均化してしまう。それ即ち、匿名化する行為と言えるのではないかと。それに気付いた瞬間から、匿名性について考えるようになった。そうして作られたのが今回の作品、(Anonymous / 匿名写真)である。



「Anonymous」(2013)



「human≡object」(2010)



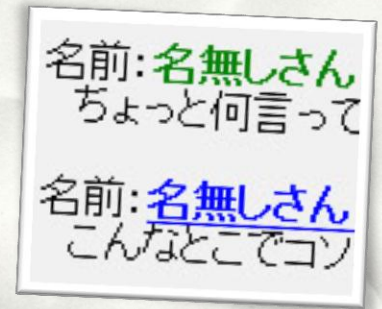
「ATTACK!!!」(2011)



「BODYSCAPE」(2007)

■ 2ちゃんねるについて

「匿名」というと、まず真っ先に思い浮かぶのが2ちゃんねる(以下 2ch)をはじめとする「匿名掲示板」の存在である。匿名掲示板では、誰が書き込んだのかをわざわざ記名する必要がなく、個人情報を秘匿して書き込むことができる。「誰が書き込んだのかわからない」ということは、発言の責任が自分に返ってこない(実際にはそうでもないけど)ことにもなるので、発言の敷居が低くなるということでもある。発言の敷居が低くなると、現実世界では言いづらい発言をすることも可能になるために、活発な意見交換に役立つ反面、誹謗中傷やデマ、イタズラ、犯行予告などの社会問題を引き起こすことが問題になっている。



2ch などの匿名掲示板の書き込み

自分が「おもしろい」と感じるのは、「匿名性」という仮面をかぶることによって、途端にモンスターへと豹変する人間の気質である。仮面を被って強気になったり、普段はやらないことをやったりと、仮面の表と裏でこうも行動が変わるなんて、なんだか滑稽だとも思う。

2ch の利用者数は 1000 万人を超えと言われており、日本のネット文化として定着していると言えるが、このような匿名掲示板がここまで隆盛するのは日本だけという記事をどこかで見たことがある。顔を隠して本音を言いたいというのは、日本人の国民性でもあるのだろうか。(海外にも「4chan」という 2ch に似ている匿名掲示板があるが、海外ではアカウント制が普通で、あまり快く思われていないらしい。)

2ch には、「女神」と呼ばれる一般女性が、自分の顔を隠しながら、その裸体をケータイなどで写真に撮り、アップロードしている場面が見かけられる。「女神」の写真と書き込みは、掲示板を見る男性たちによって歓迎と称賛と欲望的となり、女神は自身の裸体と引き換えにその「チャホヤ感」を得られるという仕組みだ。裸体という、日常では最も隠されている部位を、匿名という仮面をかぶることによって惜しげもなく公開してしまうという、秘匿の逆転現象が起こっているのが面白い。



2ちゃんねるの「女神」

海外でも、「仮面舞踏会」や「仮装パーティー」「ハロウィン」など、匿名行為を楽しむイベントはたくさんある。仮面というのは、浮世を離れ、非日常的な世界へと誘うスイッチになるのであろう。

■ mixi の衰退と twitter や Facebook の隆盛について

日本における、これらのネット上の「匿名文化」にうまく入り込んできたのが、「mixi」と呼ばれる SNS だ。はじめは「招待制」と呼ばれる、限られたユーザーしか利用できないという「閉じた空間」が売りのサービスで、それによって個人情報の公開範囲をコントロールしていたが、後に招待制の意味を成さなくなっても廃止している。登録の際も本名での登録が推



日本の SNS 「mixi」

奨されていたが、実際にはハンドルネームが多かったように思う。本名を隠すこともでき、狭い範囲の人たちに公開したい情報だけを選んで公開ができる mixi のサービスは、日本のネット文化にうまく適合しているなど感じていたし、実際利用者数も 2010 年には 2000 万人ほどいたとされ、一時期かなり流行っていたという実感がある。



しかし、2013 年の現段階において、アメリカから来た twitter や Facebook の台頭によってかなり隅に追いやられた感がある。これは自分の中では少し意外なことだった。なぜなら、twitter や Facebook は基本的に本名登録で顔出しをする風潮があったので、これは日本のネット文化には合わないと思っていたのだ。しかし今や本名・顔出し・写真載せは当たり前になっていて、日本のネット文化や、匿名性に対する意識も様変わりしたなど感じる次第である。しかし、これらの SNS は個人情報拡散装置とも言える仕組みになっていて、公開には注意が必要である。それ故、自分にとって都合の悪い情報は隠匿するようになるし、「リア充感」の溢れる、「公開する価値のある情報」が選別されて公開されていく過程の中に、その人の人間性が垣間見えることもあり、興味深い。



■学校現場で感じた匿名性

私の勤めている学校現場でも、匿名性に関する面白い出来事があった。私は現在、中学校の学級担任をしており、その担当している学級において、係・当番を担当する生徒を写真に撮って、それを学級の中の掲示物にしようとしたことがある。そうすると、一部の女子が自分の顔写真を嫌がり、顔の一部、特に鼻の部分をマジックで塗り潰し隠そうとするのである。多感な思春期の生徒にとっては、自分の顔、特に鼻の部分こそコンプレックスを抱く部分なのだと、この出来事を通じて感じた。

現在、教育現場では個人情報に関する規制が厳しくなっており、生徒の写真を公開することは控える傾向にある。同僚の子持ちの女性職員は保育園に子供を預けているらしいが、保育園のサイトはアカウント制となっているそうだ。ID を持った保護者は、パスワードを入れてログインすると、我が子の写真が掲載されたブログなどを閲覧できるという。規制をかけることで、我が子の写真が流出することを防ぎ、安心・安全が守られるという仕組みだ。



鼻を隠したがる生徒

■制作現場で感じた匿名性

前述の「human≡object」や「ATTACK!!!!」においては、モデルを活用した作品を制作した。他者を撮影している以上、作品の公開にモデルの了承を得る必要がある。ある日、作品の WEB での公開をモデルに問い合わせる時に、顔が明確に写っている写真の公開は控えて欲しいと言われることがあった。しかし、顔がある程度覆われた画像に対しては公開の許

可を貰うことができた。また、モデルによっては顔の公開も厭わないという方もいて、個人によってプライバシーに関する意識に違いがあることを強く感じた。

■揺れる個人情報に対する意識

「個人情報」とは、なければ生活が成り立たないものばかりであり、他者との識別を行い、他者と生活していく上で大切なものだ。

個人情報というと、名前や生年月日、電話番号や住所などがすぐに思い浮かぶが、自分と他者を明確に、かつ一番直感的に、身体レベルで区別するものは、やはり自分の「顔」であると思う。自分の顔写真が、自分の知らない所で公開されていたら驚いてしまうし、ゾクッとするし、良い気分はしない。しかしその反面、顔さえ隠れていれば、暴力的な発言や、顔以外の裸体の公開を実行してしまうという人間の心理が存在し、そこに人の心の揺らぎを感じるのである。

また、実生活で個人情報の漏洩に頑なな人物が、Facebook で惜しげもなく実名と顔写真を公開していたり、許可も得ず友達の写真を載せたり、クレジットカードやポイントカードの利用に無頓着だったりするのを見ると、不思議に思うことがある。

他者とコミュニケーションを取るために情報を共有したい、その一方で自分にとって不利益なものは隠したい、という人間の心理は普遍のものであると思う。特に今の時代において、自分の情報をどこまで公開するか、しないのか、個人情報に対してどのような姿勢を取るのかは、一人一人に課された課題ではないだろうか。

■今回の作品と展示会での一件

以上のような考えから、私的な写真に、顔の部分を隠蔽するペイントを施し、匿名性について触れた作品として「Anonymous」シリーズを制作することを思い立ち、制作を始めた。ちょうどその頃、友人と行うグループ展が控えていたので、そこで「Anonymous」シリーズを展示することに決めた。この展示は、和食屋の壁面を作品で飾ろうという趣旨のものである。

作品は完成し、店内に配置したものの、お店の方やお客さんから「怖い」という申し出があり、6点中5点を残念ながら撤去することになった。

この一件でわかったのは、「顔無し」というのは思った以上に一般の方に恐怖感を与えるものだということだ。顔無しの恐怖とは、例えるならば強盗犯がフルフェイスヘルメットを被って襲ってくることに近いのかもしれない。また、霊的な写真だと感じる方も存在し、「霊」という掴み所のない



「個人情報」とは？



唯一展示 OK だった「匿名写真」

存在に対する「わからない」という恐怖を感じたのかもしれない。また、閲覧者の方から、「顔を火で炙った跡のように見える」という指摘があり、私自身が思っていた以上に暴力的な行為を連想させている表現だとわかった。私が触れたい「匿名性」についてよりも先に、暴力性や恐怖感を強く感じさせてしまったのは失敗だったが、それも「匿名性」が孕んでいる問題の一つなのかもしれない。

■これからの展開

展示会での一件により、恐怖感をなるべく払拭しつつ、かつ美術作品として鑑賞し得る表現方法の作品が作れないか現在検討中である。

また、「匿名性」を一つのコミュニケーションツールとし、被写体自体に隠匿したい部分をペイントしてもらおうという作品を作ってみるのも面白いだろう。

いずれにせよ、「匿名性」とは現代において重要なキーワードの一つだと感じているし、それを表現する方法も、まだまだ先がありそうだ。しばらくこのテーマについて考えて制作していきたい。(2013.2.15)



今回、「一番怖い」と言われてしまったのがコレ。内容は、幼き頃の自分が写った家族写真である。